

エコビレッジ「自足」と「共存」との

両立を目指して(第2回)

東海大学国際地域学研究所

新谷 舞子

スバンホルムの例

□概要

デンマークにおける有機農業のパイオニアである「スバンホルム(Svanholm)」というエコビレッジに、2008年9月3日から30日までの約1カ月間、滞在した。週30時間の労働で、食と住が無料で提供される「ゲストワーカー」として、昨



スバンホルムの正面入り口

年創立30年目を迎えたスバンホルムの暮らしを体験してきた。

スバンホルムは、「コレクティブハウス」として始まった。初期メンバーの1人は、このような暮らし方を選択した理由として、「さまざまな職業に従事する人たちとともに、自身の仕事である農業を行い、共に生きていきたいと思っていた」と話してくれた。住民はもともと、お城であった建物を修理しながら丁寧に暮らしている。良い物を長く使う、北欧の人々の文化を感じる。この他にも、住民の増加に伴って新しく住居を増築しているので、現在は全部で15棟ほどを所有している。

現在、スバンホルムには約130人の住民がいる。特に小さい子供がいる家族と、高齢者が多く住んでい

る印象を受けた。首都、コペンハーゲン市から西へ約55キロのところに位置し、市の中心部へは電車とバスで約1時間半かかる。ただし最寄り駅の「Frederiksund」駅まで出るバスは1時間に1本しかないため、街に出るには少々不便であるが、自転車で20分行ったところにはビーチがあり、30分ほど走ったところには大きな森があるので、自然環境に恵まれている。

ここスバンホルムの特徴を表すキーワードは、「収入の共有」「自治」「食糧とエネルギーの自給自足」になるだろう。それぞれについて、以下より詳しく説明していきたい。

□収入の共有

“ひとつの財布”の共有

スバンホルムの住民は、自身の収入の8割をビレッジに預け、残りの

2割を手元に残して生活をしている。実際、住民の約6割はスバンホルム内で働いているが、残り4割の外で働く住民も、同様に所得の8割を預けている。つまり、ひとつの財布を共有しているのだ。その分、歯の治療代など一部の支出を除き、ビレッジが住民の生活費、税金、年金などを管理している。

デンマークは、高負担高福祉国家として知られているように、所得税は50%、60%ほど、消費税は25%課税されるが、その分、教育費、医療費はほぼ無料という。「所得の再分配」がなされている国である。このような国の土壌はあるものの、8割の収入を預けるといふスバンホルムの共有度の高さには驚く。数年前まではすべての収入をビレッジに預け、そこから所得の大小に関わらず均等にお小遣いを受け取るシステム

であったが、不満が生じたために、現在の仕組みに変更したそう。

委員会の設置

「スバンホルムでは経営を厳しくしている」と初期メンバーの1人であるBolanderさんは言っていた。ビレッジ内にはキッチングループ、建築グループ、農業グループ、行政グループ、ゲストグループなどのさまざまなグループがあるが、近年、各グループにそれぞれ委員会が設けられたそう。この委員会は、他のグループから2人、ビレッジ外から1人の3人で構成されており、そのグループの経営を外部からアドバイザーとする機関として機能しているそう。より効率的な経営をしていく為に必要である、と判断をしたのだろう。今後のビレッジ運営を考えると、「外で働く人を増やしたい」とのことだ。ビレッジ外の職業の方が、所得をより得られるからだと思う。

□自治

「リーダーはいない」

130人もの人々が暮らしているのに、ビレッジの運営は決して簡単ではない。住民自らが、自身の住むコミュニティの「自治」を行っている。

る。しかし特定のリーダーや代表がいるわけではない。みな口を揃えて「リーダーはいない」と言うのだ。

例えば、食事のメニューはキッチングループが決めるのだが、その際、グループの誰か一人が指示を出すのではなく、それぞれが自分の得意な料理やその日に作りたい料理、冷蔵庫にある材料に合わせた料理などのプランを出し、その上で最終的に決めている。

みんなが主役で、みんなが平等。デンマークという国自体、上下関係を作らず、フラットな関係を好む文化があるが、ここスバンホルムもまさにそのような雰囲気を感じる。みんなで「スバンホルム」を創り上げているのだ。

週1回のミーティング

毎週火曜日の夜7時半からは、ミーティングが持たれる。最終週の火曜日は、何か決定を下すミーティングで、それ以外の週は話し合いだそう。

ミーティングは誰にでも開かれていて、ゲストワーカーでも参加可能である。事前に内容が公表されるので、自分の興味関心に合わせて出席出来る。私が見学した時は、30人ほどが来ていた。あとから聞いた話に

よると、この時はキッチンのデザインについて話し合っていたようだ。

ミーティングそのものは至ってインフォーマルなもので、途中参加、退室も可能だ。コーヒーを飲み、ケーキを食べ、また寝ころびながら参加している人もいた。

全員一致まで議論

ミーティングでは「全員一致」まで議論を続けるという。多数決ではなく、全員が納得して賛成をするまで、話し合いをするのだそう。時間と労力がかかる。忍耐と寛容性も必要だ。しかしこのようなプロセス重視の丁寧な姿勢が、コミュニティを内面から維持しているのだろう。「膨大な時間がかかるし、忍耐が必要ですね」と尋ねたところ、「NO」というからは、その案に見合う代替案を示す必要があるから、みんなだいたいYESに回るよ。(笑)」と教えてくれた。この事実と同感する気持ちもあり、また内実を垣間見られたような気がした。

□食糧とエネルギーの自給自足

ほぼ自給自足を達成している食糧事情

スバンホルムでは食糧はほぼ自給、エネルギーは完全自給を達成し

ている。

約230ヘクタールの農地を有し、ジャガイモ、トウモロコシ、ニンジン、豆類などの野菜と、数種類のリンゴ、洋ナシなどの果物を栽培している。ブラックベリーは野生の木があり、取り放題であった。農薬、化学肥料は一切使わない、有機栽培をしている。しかし大規模農業で、例えばジャガイモを収穫するマシンがあり、4〜5人の人間が乗り込み、掘り起こしたその場で、ジャガイモとその他のもの(石、泥、茎など)を分別する。

コモンミール(共食)で出される食事のほとんどは、こうしたビレッジ内で生産した食物が主で、パンやケーキも手作りだ。米、肉、魚、茶、調味料などは、外部から購入しているが、これらも出来るだけ有機



これぞポテトマシーン

のものにこだわっているという。
エネルギーは完全自給を達成

スパンホルムでは2機の風力発電機を所有していて、エネルギーを完全に自給している。風力発電や太陽光発電といった「自然エネルギー」は、気候や環境の変化に応じてエネルギー量に変化する。日本でもこの点が少しネックになって、自然エネルギーの導入がなかなか進まないが、私がスパンホルムにいた1カ月前、エネルギーの問題は何も起こらなかった。常に安定した電力が確保出来ていた。

他にも、環境に負荷をかけないためにさまざまな取り組みを行っている。森林内の枝や木のカスは「セントラルヒーティング」に利用しており、自動車を共有して使う「カーシェアリング」も実践している。さらに「コモンミール」として食事を一度に作ってしまうことで、エネルギーと水道量の節約につながっている。集住する「こと」で生み出される大きなメリットだ。

□ 共育 する環境

スパンホルム内には保育施設が一つあり、子供を預けることが出来る。

滞在中、子ども連れの数家族が集まって談笑したり、天気の良い日には一緒にごはんを食べたりしている光景をよく見かけた。前述のBoさんは、「自分の子どもの、子ども時代には、自信と誇りを持っていく」と胸を張っていた。顔見知りの中で育てられるという安心感がある。職業も、価値観も、経験も、考え方も違つさまざまな大人がいて、その大人たちが自分の子どもと接する。多様性に溢れたこのような環境で子育てが出来ることは、とても貴重なことだと感じる。

また閉鎖的になりがちな子育ても、仲間がいることで、想いや経験を共有し合える。これは「仕事と家庭の両立」といったハード面よりも、より大きな意味合いを持つと思う。従来の教えて育てる「教育」から、共に育て、共に育つ「共育」へ。つながりが希薄な現代だからこそ、そして多様性が求められる時代だからこそ、「共育」はさらに重要性を増すのではないかと考える。

□ リユース&リサイクル

残り物の再活用

スパンホルムでは、まず食べ物の残り物を出さないようにしている。

夕食の残り物は一旦、冷蔵庫で保管され、次の日の昼食として再度出てくる。新しい料理も加えて出されるが、前日の残り物が主であった。しかし衛生的にはもちろん、心理的にも全く問題を感じなかった。むしろ「残り物を出さない」というこの姿勢に感銘を受けた。それでも出てしまふ残り物や不可食部分の生ごみは、コンポストで肥料にし、農場に使用している。まさに「循環」システムだ。不要か必要かの判断は、私たちの意識のあり方、気持ちの持ちようでいくらでも変わってくる。

リサイクルルームの設置

コモンハウスの2階にはリサイクルルームがあり、住民は不要になった衣類、小物などをそこに置いておく。他の人はこれらを自由に持ちだし、使用出来る仕組みとなっている。9月は思いのほか寒かったので、私もトレーナーやカーディガ



リサイクルルーム

ン、ズボン、ジャケットまでここから貸してもらい、とても助かった。さらにここで回収した古着はセネガルに送付しており、途上国支援の役目も果たしている。出来ることを着実に、見習うべき姿勢だと思つた。ひとつの行為が幾重にも意味をもつ。

□ ゲストワーカーとしての暮らし

世界中から集まるゲストワーカー

スパンホルムでは、常時ボランティアやゲストワーカーを募集しており、また世界中の有機農場経営者とそこで働き、学びたい人たちのネットワークであるWorldwide Opportunities on Organic Farms (WWOOF)のホストとしても登録されている。

特に私の滞在した夏は、ちょうど農作物の収穫期にあたり、総勢14人のゲストワーカーと出会った。彼らの出身地は実に多様であり、スペイン人3人、オーストリア人家族の3人、イスラエル人2人、デンマーク人2人、オーストラリア人1人、ドイツ人1人、フィンランド人1人、ロシア人1人であった。年齢層は20〜30代がほとんどで、共通語は英語だった。それぞれの国民性を感じることもあり、私自身も日本人である



パーティーには子ども達も出店

ことを認識する瞬間が多くあった。彼らとの出会いが嬉しく、一緒に過ごした時間はとても楽しかった。

ワーキンググループ

ゲストワーカーが配属されるワーキンググループは、「キッチングループ」「建築グループ」「農業グループ」の3つである。それぞれに説明を加えていくと、「キッチングループ」はランチとディナーの準備をする。夕食のない月曜日と水曜日は、「建築グループ」の仕事は、住居のメンテナンス、窓の補修、ペンキ塗りなどだ。最後に私の所属していた「農業グループ」は、主に有機野菜、果物の収穫を行う。9月はちょうどジャガイモの収穫時期で、ほぼ毎日「ポテトマシーン」に乗り、ジャガイモとその他のものとの選別をしていた。騒音の中での単純作業はなかなか辛いものがあったが、自分たちが選別したジャガイモが食卓に



陽気なゲストワーカーたち

のぼる時には、感慨深い気持ちになった。

□かかわり

住民とゲストワーカー

ビレッジの住民と私たちゲストワーカーとの間に、「壁」を感じるころがあった。それは他のゲストワーカーたちも感じていたようだった。コモンミールの際も、ほとんど「住民」と「ゲストワーカー」とで分かれていた。前述したように、世界各国からさまざまな人が集まってきている。しかし交流会やウェルカムパーティーなど、お互いを知り合う、紹介し合う機会がまったくなかった。ビレッジ内でのこのような壁を感じることは悲しく、もったいないと思った。個人個人の世界観が広がる。



大盛況のオーガニックショップ

きっかけとなる、このような出会い。私だつたらさまざまなイベントや仕掛けを作りたいな、と考えていた。

周りの社会とのかかわり

スパンホルムには1軒のオーガニックショップがあり、顧客の9割は村外の人々だそう。また毎月第1土曜日には見字ツアーを開催しており、年に1度開催されるパーティーも、外部に開かれている。しかし、村の中にいけばほとんどのことが事足りてしまうこともあり、ビレッジ外に住む人たちとの交流は、盛んであるとは感じなかった。

だが〇〇さんは「開かれたコミュニティにしたい」と考えているようで、私もそうあるべきだと考える。

周りの社会との関わりは、「コミュニティ」として独自に存在するからこそ、積極的に構築していかねばならないと思う。これからスパンホルムが具体的にどのような仕掛けを作っていくのか、注目していきたい。

□「安心感」

ビレッジ内で働く人はまだしも、外で働きながら「8割」もの収入を村に預けることが出来るのは何故なのだろうか。それはお金だけでは手にすることの出来ない「安心感」があるからではないか、と考える。老後の安心はもちろんのこと、食糧もエネルギーも自給出来ているので、食糧危機が起きようと、石油価格が高騰しようと、周りがどのような状況になろうとも「生きていくこと」が出来る。そして常に誰かがそばにいて、関わる事が出来る。すれ違う時は、目を合わせて「ハイ(☺)」と声をかけ合う。

スパンホルムで生まれ、育った住民は、「このような環境は、外にはないだろう」と話していた。そしてこの安心感こそが、「幸せ」につながっているのだろう。